宮城県文化財調査報告書第64集

宮城県営圃場整備関連
遺跡詳細分布調査報告書

(昭和 54 年度)

昭和 55 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

本書は，宮城県教育委員会が昭和54年度に国庫補助事業で実施した農業基盤整備事業関連の３遺跡について，その遺跡詳細分布調査の結果をとりまとめたものであります。

最近の種々の開発事業に伴って，埋蔵文化財の調査は年ごとに急激な増加を示しており，農業基盤整備事業と関係する遺跡を保護するための調整も，ますます重要な課題になってきております。

本年度調査した遺跡は，例年のように，関係者の深い理解と協力によって，一部を除いてほとんどが現状のままで保存されることになりました。まことに喜ばしい限りであります。

ここに，本報告書を刊行するに当たり，関係各位の御理解と御尽力に対しまして深甚なる敬意と感謝を申しあげる次第であります。

昭和 55 年 3 月

宮城県教育委員会
教育長　北　村　　潮

目　　次

序
Ⅰ　はじめに…… 1
Ⅱ　石神遺跡…… 3
Ⅲ　七夕西遺跡…… 13
Ⅳ　根岸遺跡…… 23

例　　言

１．本書は県営圃場整備事業に関連する３遺跡の調査報告書である。

２．調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し，丸森町及び岩出山町教育委員会の御協力をいただいた。

３．本書の作成に際し，灰白色火山灰の鑑定は東北大学農学部教授庄司貞雄，助手山田一郎の両氏に依頼した。

４．本書における土色は「新版標準土色帳」(小山・竹原：1967）を使用し，土性については，国際土壌学会の粒形区分を参照した。

５．この報告書に使用した地図は，国土地理院発行の２万５千分の１地形図の丸森南東部と川渡である。

６．執筆編集は文化財保護課が行なった。各遺跡の担当者は次のとおりである。

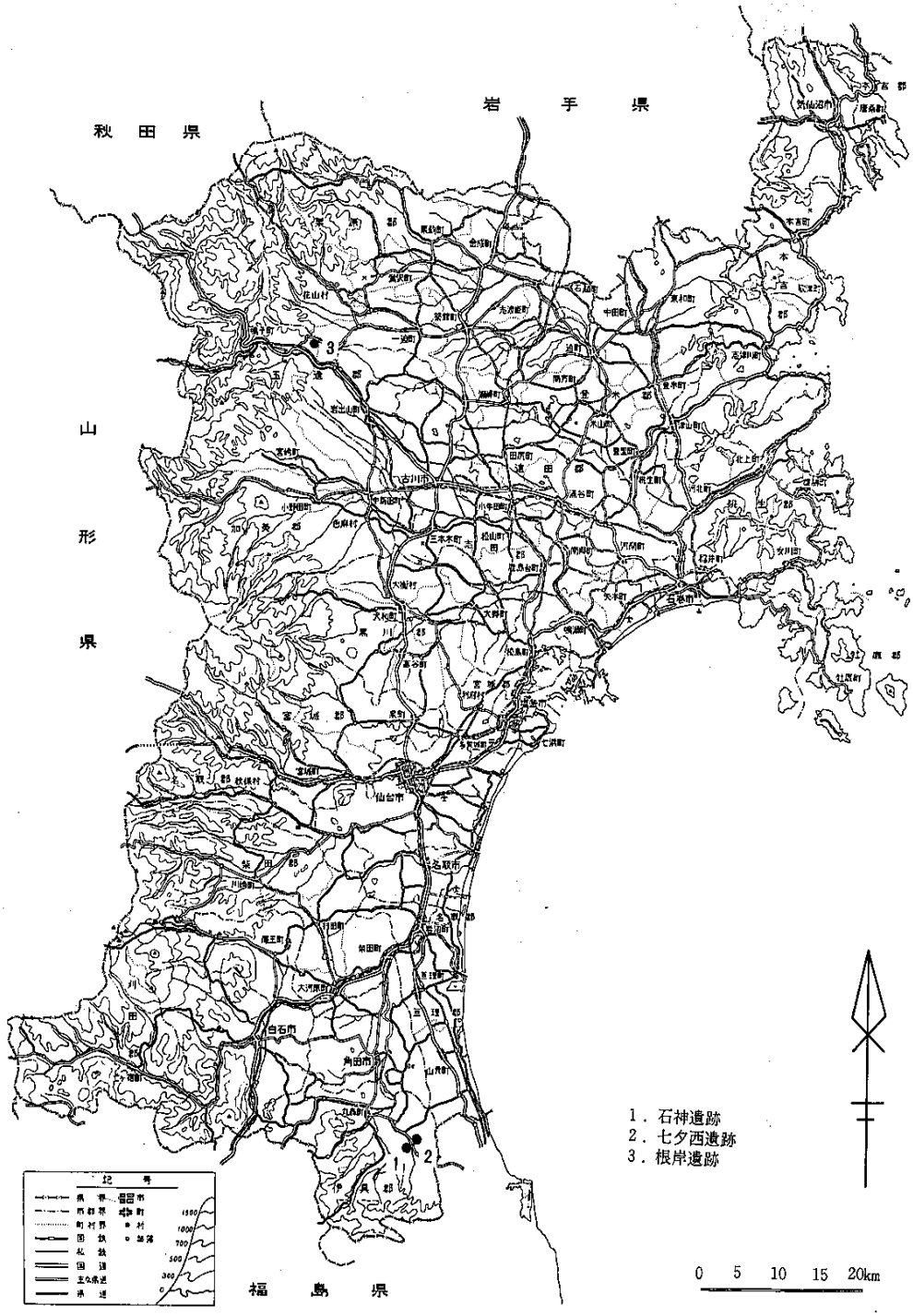
石神遺跡　　土岐山　武
七夕西遺跡　　小野寺　祥一郎
根岸遺跡　　渋谷　正三

Ⅰ．はじめに

宮城県教育委員会は，昭和54年度の国庫補助事業で行なう遺跡詳細分布調査として，以下の３遺跡の調査を実施した。これらの調査は，県営圃場整備事業に係る遺跡を対象として，当該事業を計画した関係各機関との間で，遺跡保存のための実施計画変更等の協議を行なうため，必要な遺跡の資料を収集することを目的としたものである。

石神遺跡および七夕西遺跡は，宮城県伊具郡丸森町大内字石神および七夕西に所在する。宮城県農政部が計画した丸森町大内地区の県営圃場整備事業は，全体で299㏊を対象に昭和52～58年度(予定)で面工事を実施しようとするものであるが，県教委が丸森町教育委員会と行なった分布調査の結果，11ヵ所の遺跡が係り合いをもつことが確認されている。石神遺跡および七夕西遺跡は，そのなかの遺跡で，周辺の面工事が昭和55年度であるため，農政部との協議で遺構確認調査を行なうことになった。

根岸遺跡は，岩出山町一栗字根岸にある。岩出山町二ツ石土地改良区は，県農政部の指導助言を得て県営圃場整備事業を昭和49年度から実施してきている。総面積は323．２㏊におよび昭和54年度までに263.6㏊の事業を終え，55年度の面工事は59.6㏊についての整備計画をたてている。県教委が岩出山町教育委員会と行なった遺跡分布調査の結果，昭和55年の事業予定地内に根岸遺跡が係り合うことが確認され，関係者間の協議のうえ範囲確認の調査を実施することになった。


秋田県
岩手県
山形県
福島県
仙台市
名取市
白石市
角田市
1．石神遺跡
2．七夕西遺跡
3．根岸遺跡
0 5 10 15 20km

遺跡位置図

Ⅱ　石神（いしがみ）　遺　跡

調査要項

遺跡所在地：宮城県伊具郡丸森町大内字石神

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育委員会文化財保護課

調査員：平沢英二郎・新庄屋元晴

土岐山　武・森　　貢喜

調査期間：昭和54年6月2日～6月30日

調査対象面積：約15,000㎡

発掘面積：約4,500㎡

遺跡記号：FQ（宮城県遺跡地名表登録番号10140）

調査協力機関：丸森町教育委員会

Ⅰ．遺跡の立地

石神遺跡は伊具郡丸森町大内字石神，砂田に所在し，丸森町中心部から国道113号を南方に約10㎞進んだ地点に位置する。

県の最南端伊具郡丸森町は，東，南，北西三方をそれぞれ亘理地塁山地，阿武隈山地，角田丘陵性山地によって囲まれており，北部がわずかに開けて沖積低地となっている。この積積低地は伊具盆地の南端に当たる。この低地内を阿武隈川が大きく蛇行しながら流れている。

阿武隈山地からは丘陵が樹枝状に丸森町南部にのびてきているが，この間をぬうように，新川，内川，雉子尾川などの小河川が北流し阿武隈川にそそぎ込んでいる。

遺跡はそれら河川の一つで丸森町の東部を流れる雉子尾川西岸の自然堤防上に立地している。遺跡は石神地区とそこより南西方向に約200m離れた砂田地区とから成る。

石神地区は中央部がゆるやかな微高地となっており，東，西側にある水田よりも30～150㎝ほど高く，標高は約25～26mである。現状は桑畑，麦畑，野菜畑，水田である。

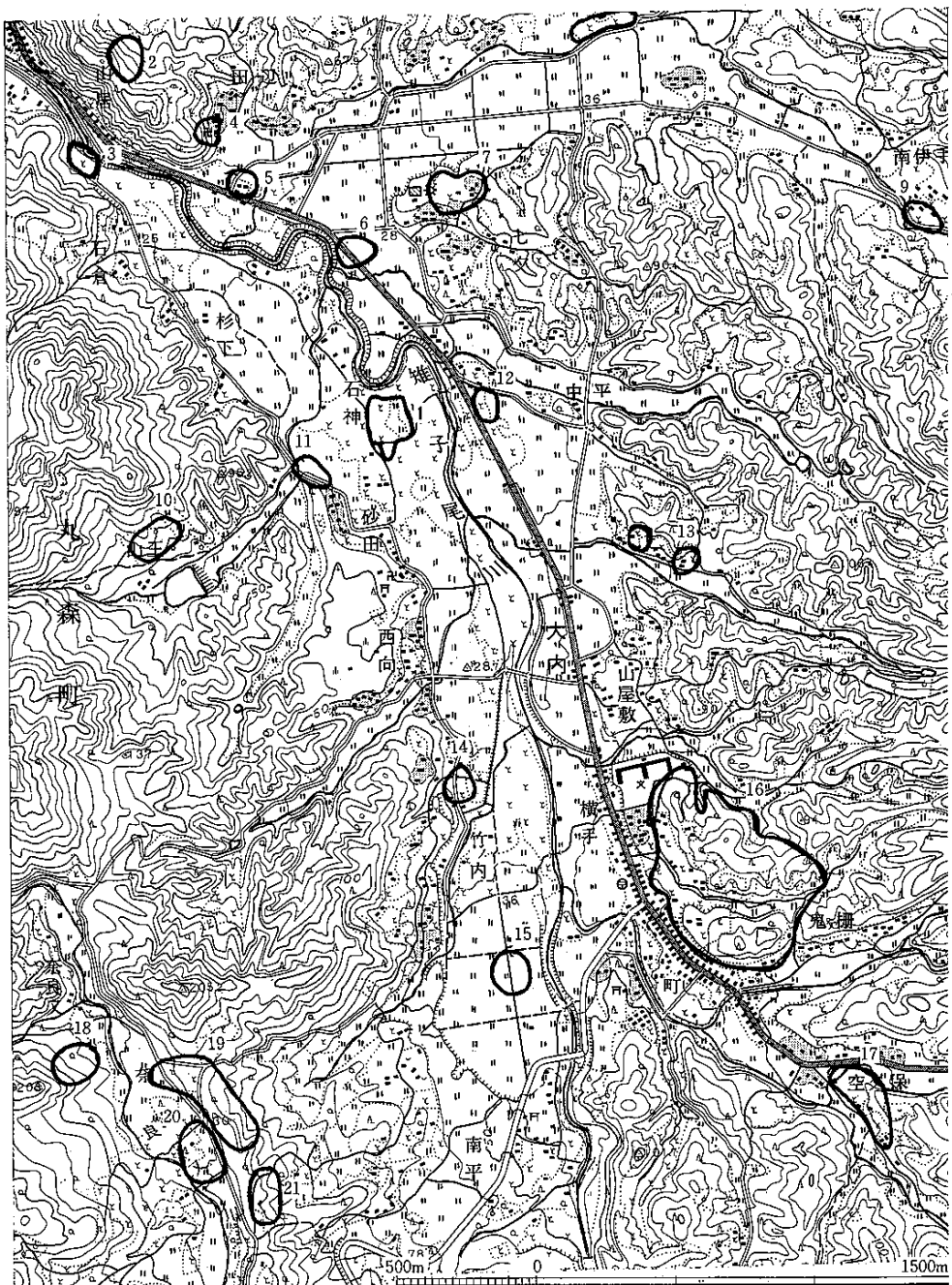
砂田地区もやはりゆるやかな微高地となっており，周囲の水田よりも60～200㎝高くなっている。遺跡の現状は桑畑と野菜畑である。標高は約26～27mである。

周辺にはほぼ同時代の遺跡として七夕西，中平，砂田遺跡が存在し，その他縄文時代から中・近世までの遺跡も数多く分布している。

Ⅱ．調査の方法と経過

調査は昭和54年６月２日から開始し，遺跡の範囲，遺構の有無，遺構確認面までの深さ，及びその性格を把握することを意図して行われた。

調査区を設定するに当たっては，石神地区，砂田地区それぞれに磁北に一致する基準線を任意に設定した。これを基準として，対象地区全体に３m単位の方眼を組んだ。グリッド名は３m単位に東西方向をアルファベット，南北方向をアラビア数字で示した。石神地区：中央部微高地には，３mおきに幅３m長さ６～51mの東西トレンチを設定した。東，西側の水田には，調査対象範囲の縁辺部にそれぞれ３本ずつトレンチを設定した。調査の結果，中央部は耕作土の下に，薄い暗褐色土層と，厚い砂層が堆積しており，かつて本遺跡は雉子尾川の氾濫原であったことが確かめられた。遺構，遺物は中央部から発見され，東，西側の水田では削平が著しく，遺構，遺物は全く発見されなかった。砂田地区：基準線を中心に南北に長いトレンチを３本平行に設定した。調査の結果，本地区は削平が著しく，表土下すぐに砂層となり，遺構，遺物の発見は少なかった。調査は5月30日に終了した。



1．石神遺跡
2．下田辺古墳群
3．河原囲遺跡
4．長泉寺境内経塚
5．塚田古墳
6．七夕西遺跡
7．七夕遺跡
8．伊手遺跡
9．桜田遺跡
10．山王遺跡
11．砂田遺跡
12．中平遺跡
13．熊ノ入遺跡
14．三代河原遺跡
15．千賀田遺跡
16．陣林城跡
17．岩ノ入遺跡
18．奈良又遺跡
19．雑古幡遺跡
20．東福田遺跡
21．平遺跡

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅲ．調査の成果

〈石神地区〉

１．基本層位

基本的な層位は次のとおりである。

第Ⅰ層：黒褐色土と褐色土層である。(鉄分沈澱の割合により二分される。)水田耕作土である。厚さは中央部南側で10～20cm，北側で40～50cmで北側にいくにしたがって厚くなっている。

第Ⅱ層：暗褐色土層である。遺物を含んでいる層で，厚さは５～20cmである。中央部中心にみられるが，そのあり方は一様ではなく場所によりみられない所もある。遺物の混入が雑で，磨滅も激しく再堆積層であろうと思われる。東，西側水田では全く認められない。

第Ⅲ層：暗褐色の砂層である。遺物を含んでいない。

２．発見された遺構と遺物

発見された遺構には住居跡５軒，焼土遺構６基，土壙５基，溝４本，配石１がある。それらはすべて第Ⅲ層上面で確認され，その分布は微高地全域にわたる。

〔竪穴住居跡〕

いずれも住居跡平面の一部分のみの検出のため，詳細については不明なものが多い。この中で住居跡の輪郭がほぼ捉えられる第１，第４住居跡は，平面形がいずれも方形のもので，その規模は第１号住居跡は一辺が約3.4m，第４号住居跡は3.9mである。第１号住居跡は，カマド側壁と思われる切り石が一部露出しており，北側に煙道が延びている。第４号住居跡は東側に煙道が延びている。第５号住居跡も東側に煙道がみられる。

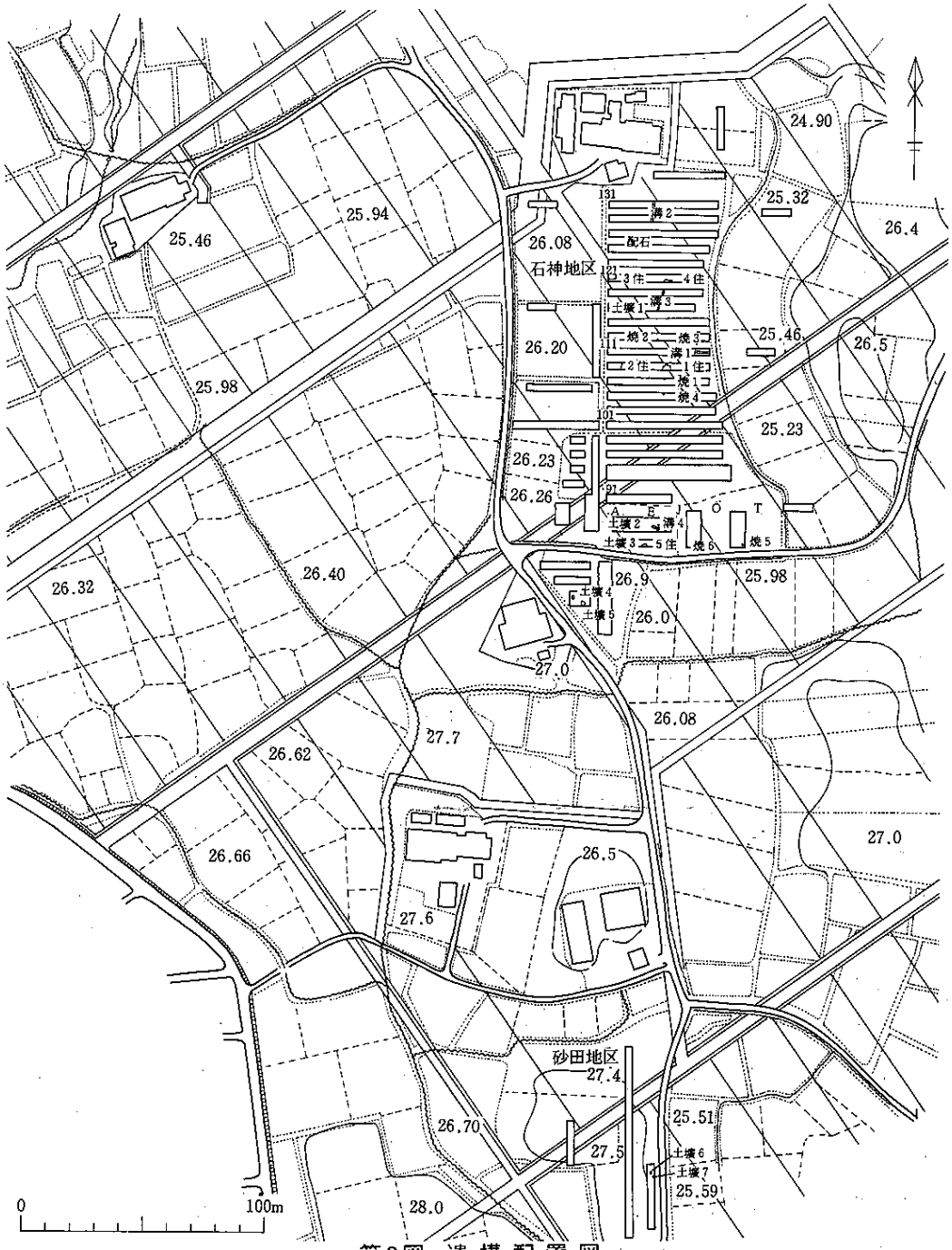
竪穴住居跡出土遺物

遺構堆積土上面において遺物が発見されたが，今回は確認調査のため遺物はできるだけ取り上げていない。第１号住居跡では完形に近い土師器坏が２～３個体分，第３号住居跡では土師器坏口縁部破片が１片，第５号住居跡では土師器坏口縁部破片および土師器甕１個分がみられた。調査中の観察によるとそれらの遺物の時期はおよそ栗囲～国分寺下層式である。なお，遺構部分から発見された遺物についての取扱いは以下各遺構についても同じである。

〔焼土遺構〕

第Ⅲ層上面で６基確認された。平面形は円形のもの－焼土遺構1･6(直径約40cm)，楕円形のもの－焼土遺構２（約45×60cm)，４（確認長約80×100cm)，５（約50×80cm)，やや方形のもの－

焼土遺構３（確認長約80×120㎝）とがある。いずれも堆積土中に木炭と焼土がまじっており，焼土遺構４，６は特に多い。また，焼土遺構４の堆積土中には長さ約50㎝，幅約10㎝の切り石，焼土遺構２では火熱を受けた３㎝大の石が多数みられる。



第２図　遺構配置図

焼土遺構出土遺物

焼土遺構４から土師器甕が２個体分出土している。焼土遺構５からは火熱を受けた人骨片(現存長６㎝）が出土している。

〔土壙〕

第Ⅲ層上面で５基確認された。平面形は円形のもの－土壙１（直径約１m),土壙３（直径約1.6m)，楕円形のもの－土壙４（約1.9×1.3m)，５（約22×23m）とがある。なお，土壙２は一部分確認である。

土壙出土遺物

土壙２堆積土上面から土師器の坏がほぼ１個体分出土している。ロクロ不使用で内面黒色処理がほどこされている。また，土壙１堆積土上面から羽口（３図６）が，出土している。内径約25㎝，外径約8.5㎝，現存長約６㎝である。縦に割れた破片である。

〔溝〕

第Ⅲ層上面で４本確認された。溝１は幅約１ｍで，ほぼ東西方向に延びている。溝２は幅約２ｍで，ほぼ南北方向に延びている。溝３は幅約40㎝，で，ほぼ南北方向に延びている溝４は幅60～100㎝で，長さ約3.9mである。ほぼ東西方向に延びている。

溝出土遺物（第３図４・７・８）

溝１では底面より土師器坏底部破片と砥石２（３図７・８）が出土した。土師器坏は平底で底部から体部にかけてゆるやかに内反するもので，底部切り離しは回転糸切りである。内面ヘラミガキ，黒色処理がされている。表杉の入式に属するものである。砥石は３図８が２面の使用面を持ち，形は不定で自然石様のものを用いている。３図７はタンザク形の砥石であり４面の使用面を持つ。半欠品である。溝４堆積土上面からは小形皿(３図４)が出土している。口縁部の一部がかけているがほぼ完形に近い。平底で底部から口縁にかけてゆるやかに内反する。器高約１㎝である。底部切り離しは回転糸切りである。調整は磨滅が著しく不明である。

〔配石〕

第３層上面で確認された。幅約30㎝，確認長約80㎝の南北方向に長い落ちこみがあり，その落ちこみ中に長さ15～20㎝大の石が25個前後みられた。

３．遺構以外の出土遺物

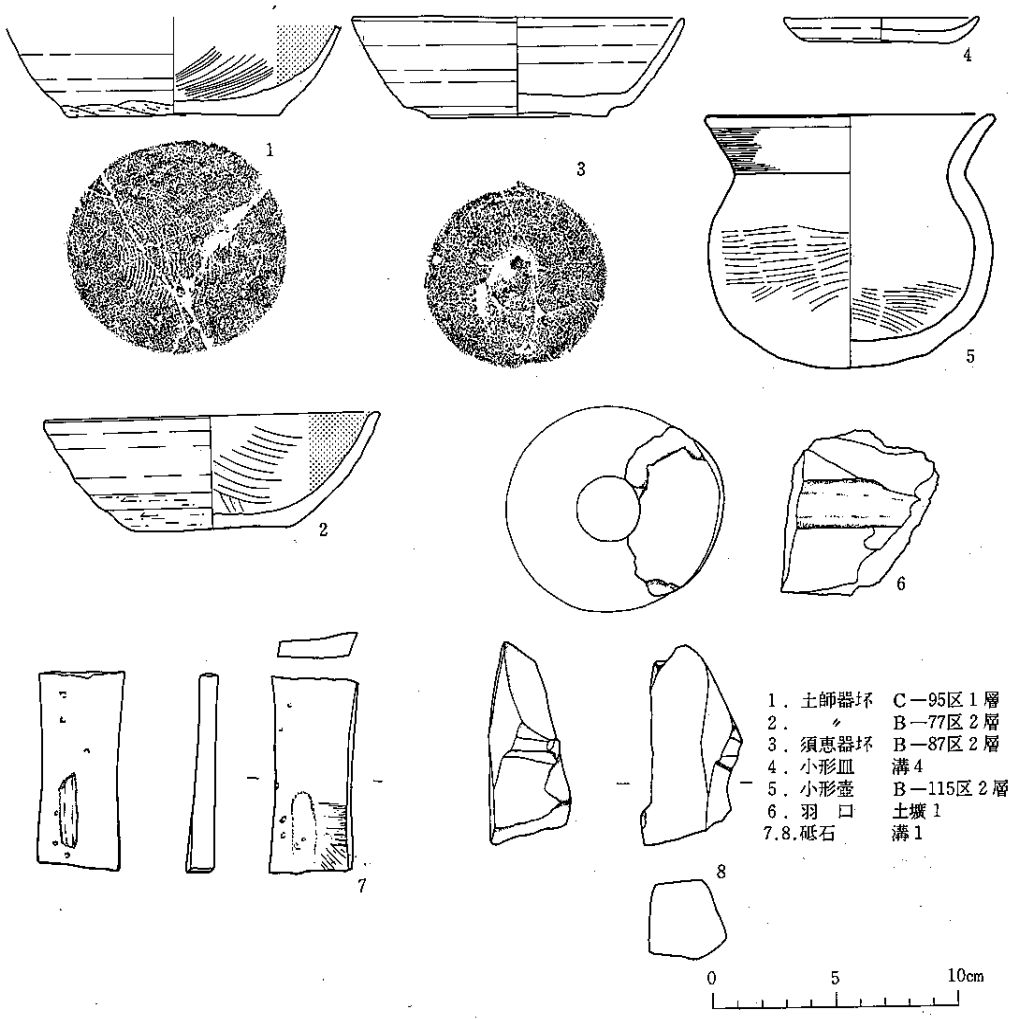
土師器

坏（３図１・２）図示したものは，いずれも製作に際しロクロを使用し，底部から体部にかけてゆるやかに内反し，内面ヘラミガキ，黒色処理が施されているものである。また，体部下

端，底部周縁に再調整が加えられており，１は手持ちヘラケズリ，２は回転ヘラケズリである。なお，底部切り離しは１は回転糸切りであるが，２は明確ではない。いずれも表杉ノ入式と考えられる。

その他図化できなかった破片が若干出土している。ロクロを使用していないものと使用しているものとがある。使用していないものには，体部内外面に段がつき，段から上が外反し，段から上が内外面とも横ナデのもの，底部丸底ぎみで底部と体部の境の外面に沈線が入いるものなどがある。ロクロを使用しているものには底部切り離しが回転糸切りのものなどがある。これらは栗囲～表杉ノ入式と考えられる。

甕　すべて小破片で全体の器形をうかがえるものはない。ロクロを使用していないものとロ



第３図　出　土　遺　物

クロを使用しているものとがある。ロクロを使用していないものはいずれも口縁部外反するもので，器面調整は口縁部内外面とも横ナデのもの，外面刷毛目，内面ナデのものなどがある。

高坏　２片出土している。いずれも脚の一部ついた坏部底部小被片である。一つは坏部内面が黒色処理されている。一つは磨滅のため不明である。

小形壺（３図５）口縁部は直線的に外傾する。体部は楕円形で底部は丸底である。器面調整は口縁部横ナデ，体部ヘラミガキ，内面は口縁部不明で体部ナデが施されている。南小泉式と考えられる。

須恵器

長頸壺　１片だけ出土している。頚部中央部分の破片である。外面頚部に二条の平行沈線がめぐる。内面ロクロ調整である。時期は不明である。

坏（３図３）体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部平底である。底部切り離しはヘラ切りである。内外面ともロクロ調整である。

その他図化できなかった破片が１層，２層より出土している。すべて小破片であり全体の器形をうかがえるものはない。内外面ともロクロ調整されている。

赤焼土器

坏　Ｂ－131 区１層より１片だけ出土している。底部破片である。

〈砂田地区〉

１．基本層位

基本的な層位は次の通りである。

第Ⅰ層：耕作土で黒褐色土である。厚さは30㎝前後である。

第Ⅱ層：遺物を含んでいない層で暗褐色の砂層である。

２．発見された遺構

〔土壙〕

第１層上面で２基確認された。平面形はいずれも楕円形で，土壙６が約80×70㎝，土壙７が約70×60㎝である。土壙６・７とも堆積土中には多量の木炭がみられた。

３．遺構以外の出土遺物

土師器

坏　Ⅰ層中より出土している。すべて小破片のため全体の器形をうかがえるものはない。ロクロを使用しているものとしていないものとがある。磨滅が著しく調整については不明である。

須恵器

坏　Ⅰ層中より出土している。すべて小破片であり全体の器形をうかがえるものはない。内

外面ともロクロ調整されている。

Ⅳ．ま と め

１．石神遺跡は雉子尾川によって形成された自然堤防上に立地している。

２．今回の調査によって発見された遺構には竪穴住居跡５軒，焼土遺構６基，土壙７基，溝４本，配石１とがある。遺構はすべて地山面で確認されている。地山には５～20㎝の厚さで第Ⅱ層がのり，若干の遺物を含むが，遺物の出土状態等からみて二次的な堆積によるものと考えられる。竪穴住居跡は奈良～平安時代である。その他の遺構については所属時期，性格ともに明確でないものが多い。ただし，焼土遺構５からは火熱を受けた人骨が出土しており，火葬もしくはそれに類する何らかの施設であることが考えられる。これに類似する遺構としては丸森町中平遺跡（1978：県教委），白石市谷津川遺跡[注1]（1980：県教委）などがある。

３．出土遺物には，土師器，須恵器，赤焼土器，砥石，羽口などがある。土器類はいずれもほとんどが奈良～平安時代に属するものと考えられるものである。

４．遺跡の範囲は石神地区中央部を中心として，地形上石神地区東，西側水田，北側麦畑の一部，南側桑畑と砂田地区まで含まれると思われるが，石神地区中央部を除いた地域は，開田工事その他によって，著しく原状がそこなわれており，遺構，遺物等は発見されなかった。

（註１）　ただし谷津川遺跡の土壙の場合は，中世に属する可能性もあり，形態的にやや異なる。

図 版 1

遺跡遠景
（北東より）

遺跡近景
（石神地区
北西より）

焼土遺構 4
土師器甕
出土状況

Ⅲ　七夕西遺跡

たなばたにし

調査要項

遺跡所在地：宮城県伊具郡丸森町大内字七夕西

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育文化財保護課

調査員：森　貢喜・小野寺祥一郎

調 査 期 間：昭和54年10月11日～10月19日

調査対象面積：約13,000㎡

発 掘 面 積：約2,100㎡

遺 跡 記 号：ＦＷ（宮城県遺跡地名表登録番号10138）

調査協力機関：丸森町教育委員会

Ⅰ．遺 跡 の 位 置 と 環 境

七夕西遺跡は，丸森町の中心部から東南約９㎞で，伊具郡丸森町大内字七夕西に所在している。

宮城県南東部の伊具郡には，南は阿武隈山地，東は亘理地塁山地，北西は角田丘陵性山地，北は角田丘陵に囲まれた角田盆地があり，丸森町はこの角田盆地の南端に位置している。阿武隈山地に源を発する阿底隈川は，角田盆地をほぼ南北に流下し､仙台湾に注いでいる。この阿武隈川の支流の一つである雉子尾川は，福島県境から丸森町南部を南北に２分し，ところどころに沖積性低地を形成しながら阿武隈川に合流している。遺跡の所在する大内地区一帯には雉子尾川によって形成された沖積性低地が細長く南北に広がり，標高 100ｍ～200ｍの丘陵かそれを挾むように連なっている。遺跡は，雉子尾川が大内地区に形成した自然堤防上にあり，雉子尾川の東岸に立地している。標高は約 24～26ｍで，雉子尾川との比高差は約６ｍである。遺跡の中央を国道 113 号線が南北に通過しており，２分している。遺跡の大部分は近年開田されており一部分のみ畑地（桑畑，豆畑）として残されている。

本遺跡周辺には，縄文時代から近世に至るまで数多くの遺跡が分布している。遺跡の東側の丘陵には七夕遺跡があり，縄文時代中期の遺跡であることが確認されている（斉藤：1968)。南側には中平遺跡（太田：1978)，石神遺跡（本書所収)，砂田遺跡があり，いずれも自然堤防上に立地する奈良・平安時代の遺跡である。北側に塚田古墳（古墳後期)，長泉寺境内経塚(江戸)などがある。

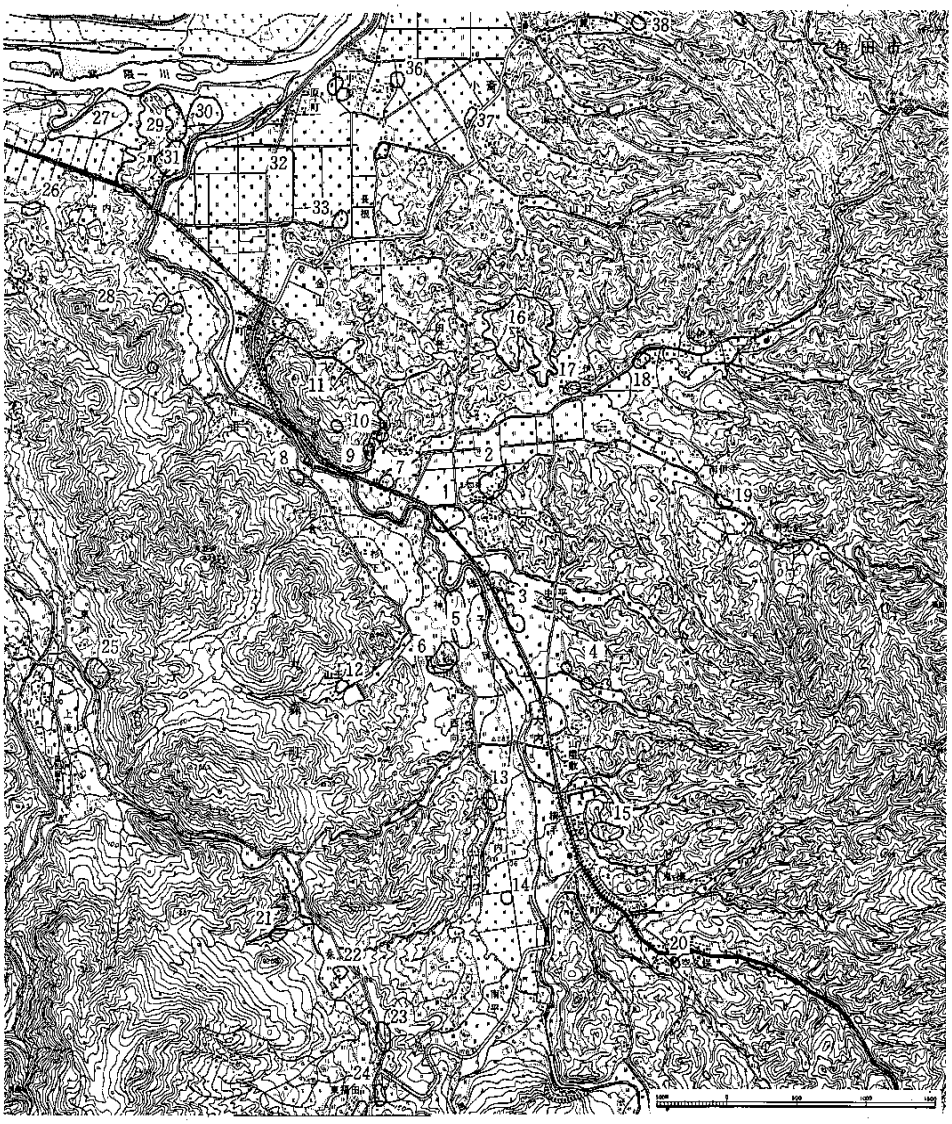
Ⅱ．調 査 の 方 法 と 経 過

１．調査の方法

今回の調査は，圃場整備事業に係る遺跡のほぼ全域である約13,000 ㎡を対象とした遺跡確認調査である。遺跡は国道 113 号線によって２分されているために便宜上国道から西側を西地区東側を東地区と呼ぶことにした。

西地区：現在，調査地区が桑畑になっており，３ｍ単位のグリッドを組むことが不可能なために，桑の畝と畝の間に１ｍ×６～９ｍのトレンチを10本入れ，調査終了後トレンチの平面図の作成及び地山までのレベリングを行なった。

東地区：東地区のほぼ中央に第１原点を設定し，第１原点から真北方向に 30ｍの位置に第２原点を設定した。第１原点と第２原点を結ぶ線を南北の基準線とし，第１原点を通り南北の基準線に直交する線を東西の基準線とした。そして，第１原点を中心として調査区全体に３ｍ単



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	七夕西遺跡	古墳・奈良・平安	14	千賀田遺跡	縄文	27	大古町北遺跡	奈良・平安
2	七夕遺跡	縄文(中)	15	陣林城跡	中世	28	台町古墳群	古墳(中後)
3	中平遺跡	奈良・平安	16	冥護山館跡	中世	29	台町A遺跡	縄文・弥生
4	熊ノ入遺跡	縄文? 奈良?	17	伊手遺跡	弥生	30	台町原町B遺跡	奈良・平安
5	石神遺跡	奈良・平安	18	下梅ヶ作遺跡	弥生(中)	31	台町館跡	中世
6	砂田遺跡	奈良・平安	19	桜田遺跡	縄文	32	船渡道鴻ノ町遺跡	奈良
7	塚田古墳	古墳(後)	20	岩ノ入遺跡	縄文(後晩) 弥生(中)	33	日照田遺跡	縄文(中)
8	河原囲遺跡	弥生	21	奈良又遺跡	縄文・弥生・奈良・平安	34	松崎遺跡	縄文(中)
9	長泉寺境内経塚	江戸	22	雑古幡遺跡	縄文(後晩)	35	前並遺跡	古墳(中)
10	下田辺古墳群	古墳(後)	23	平遺跡	縄文(前)	36	中原遺跡	古墳(中)
11	金山城跡	中世	24	東福田遺跡	縄文(後晩)	37	根切遺跡	古墳(中)
12	山王遺跡	縄文(晩)	25	沼遺跡	縄文	38	北町場遺跡	縄文(晩)
13	三代河原遺跡	縄文(晩)	26	寺内作田遺跡	弥生			

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

位の方眼を組んだ。グリッド名は東西方向をアルファベット，南北方向をアラビア数字で示した。調査は，３m単位のグリッドを基本とし，第１原点を中心に３m毎に４～14 のグリッドを１つのまとまりとするトレンチを入れて行ない，計24本入れることができた。調査終了後平面図の作成及び地山までのレベリングを行なった。

遺物の取り上げは西地区においてはトレンチ毎に，東地区においてはグリッド毎に行なった。

２．調査の経過

調査は，昭和54年10月11日に東地区から開始した。開田の際にかなり遺構が削平されていることが予想されたので，周囲の水田より 80cm 程高くなっている畑地に３本のトレンチを入れた。

その結果畑地部分は，開田の際に60cm 前後の盛土を行なっていることがわかった。表土下はすぐに無遺物層（本遺跡の地山である。）となり，その上面において土壙５基，溝４本が発見された。各トレンチの表土からは土師器，須恵器が出土している。

次に，畑地周辺の状況を知るために水田部分にも順次トレンチを入れた。第20 トレンチ地山面において土壙５基，ピット５が発見された。しかし，他のトレンチからは遺構を発見することができなかった。第13・14・20・25・26 トレンチの表土から少量の土師器・須恵器が出土している。

東地区の調査が終了した段階で，西地区にもトレンチを入れた。表土下はただちに無遺物層となり，遺構を発見することはできなかった。第２・３・４・８・９トレンチの表土からは少量の土師器，須恵器が出土している。

調査のすべて終了したのは 10 月 19 日である。

Ⅲ．発見された遺構と出土遺物

１．基本層位

第１層：表土である。西地区はにぶい黄褐色シルト層で，層の厚さは 40～60cm 前後である。東地区は褐灰粘土質シルト層で，層の厚さは30～50cm である。土師器，須恵器を含む。

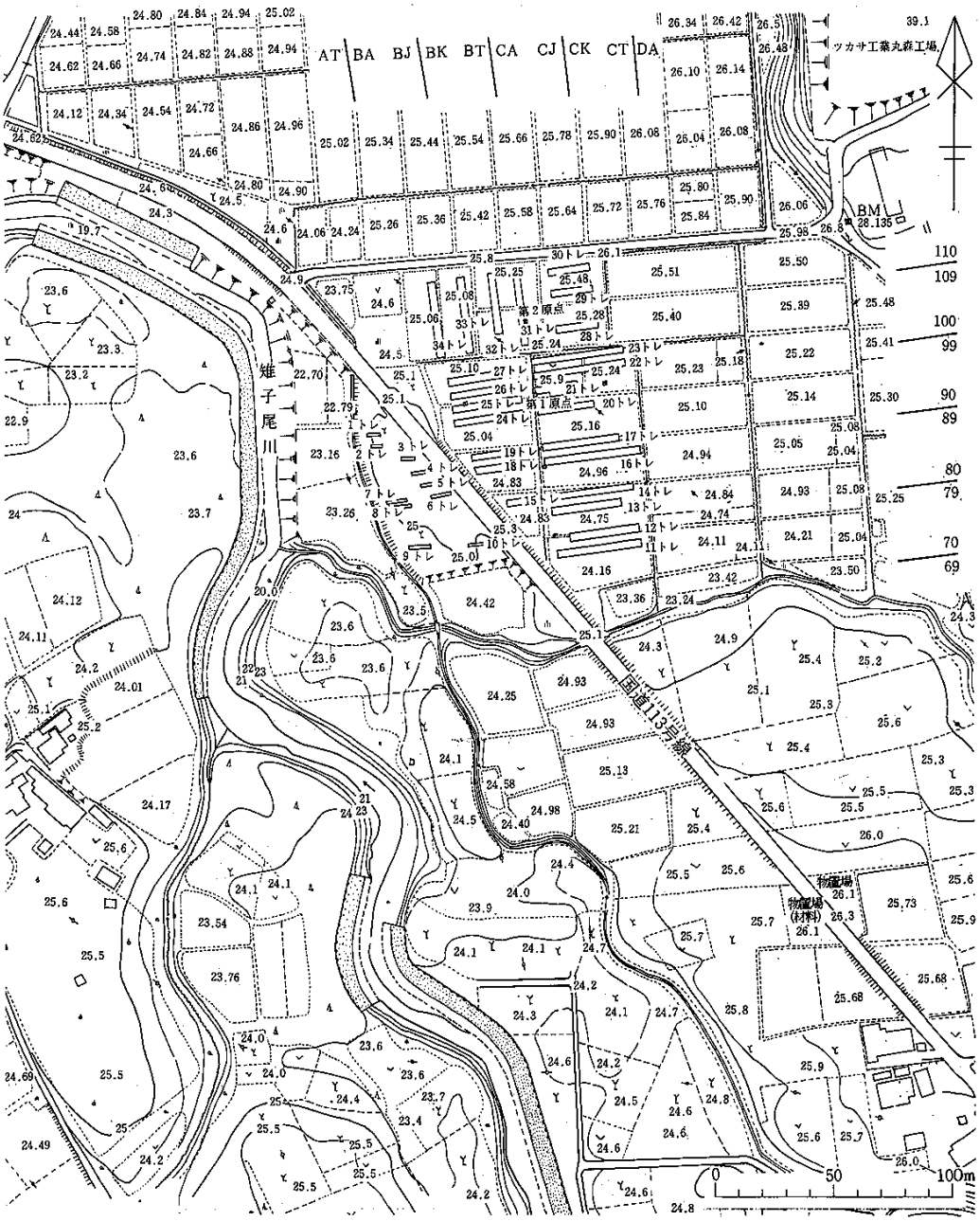
第２層：東地区においてはこの層の上面で遺構が発見されている。西地区はにぶい黄褐色シルト層で，東地区は褐色粘土質シルト層である。遺物の含まれていない層である。２層以下は砂層及び礫層であり，遺物は全く含まれていない。

２．発見遺構（第３図）

西地区においては全く遺構を発見することができなかった。東地区においては土壙10基，溝４本，ピット５が発見された。いずれも地山面において発見されている。

土壙：トレンチの壁にかかって平面形及び規模の不明なものもあるが，いずれも平面形は楕

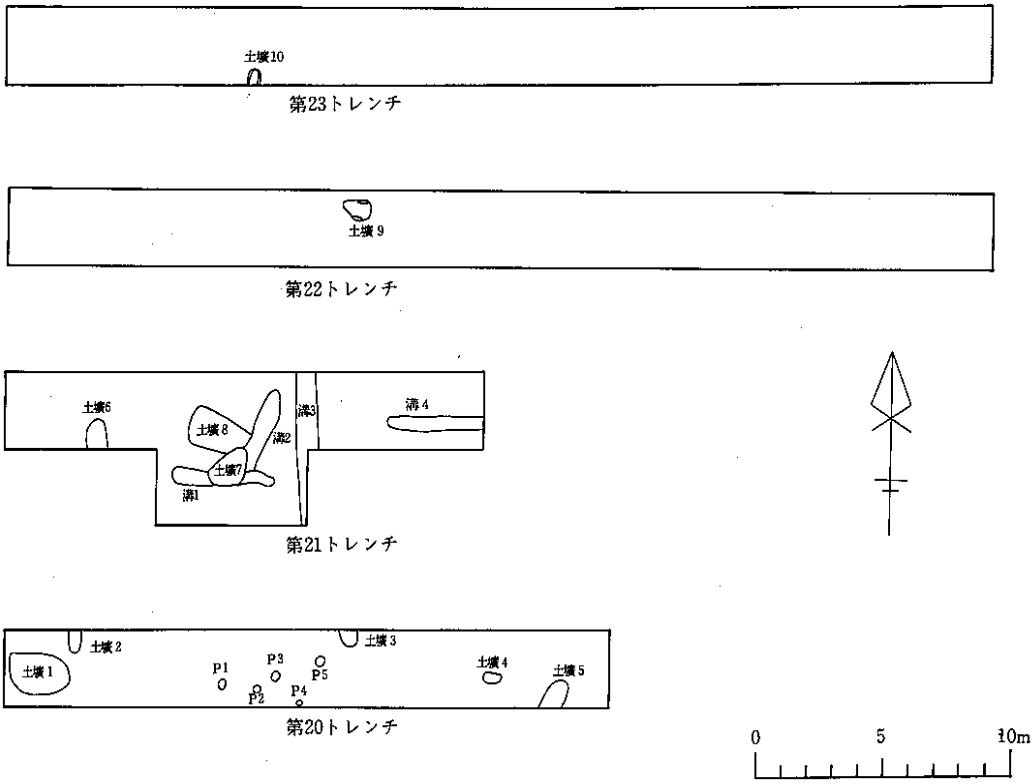
円形で，規模は長軸約1.0～2.5mで，短軸約0.5～1.5mである。土壙３からは土師器甕が土壙内堆積土中に横位の状態で発見されている。土壙８の堆積土中には，焼土・木炭・土師器・須恵器片が含まれている。土壙９の壁は凝灰岩でつくりあげられており，堆積土中には焼土・木炭が多量に含まれている。同様な遺構としては土壙10があり，堆積土中には焼土・木炭の他に土師器片が含まれている。



第２図　グリッド配置図

溝：幅は約 0.6～1.0m，長さは約 3.5～4.0mである。溝３・４はトレンチの壁にかかっており長さは不明である。

ピット：第20トレンチの中央において５個発見されている。径0.3～0.5mである。柱穴として認められるものはなかった。



第３図　遺 構 配 置 図

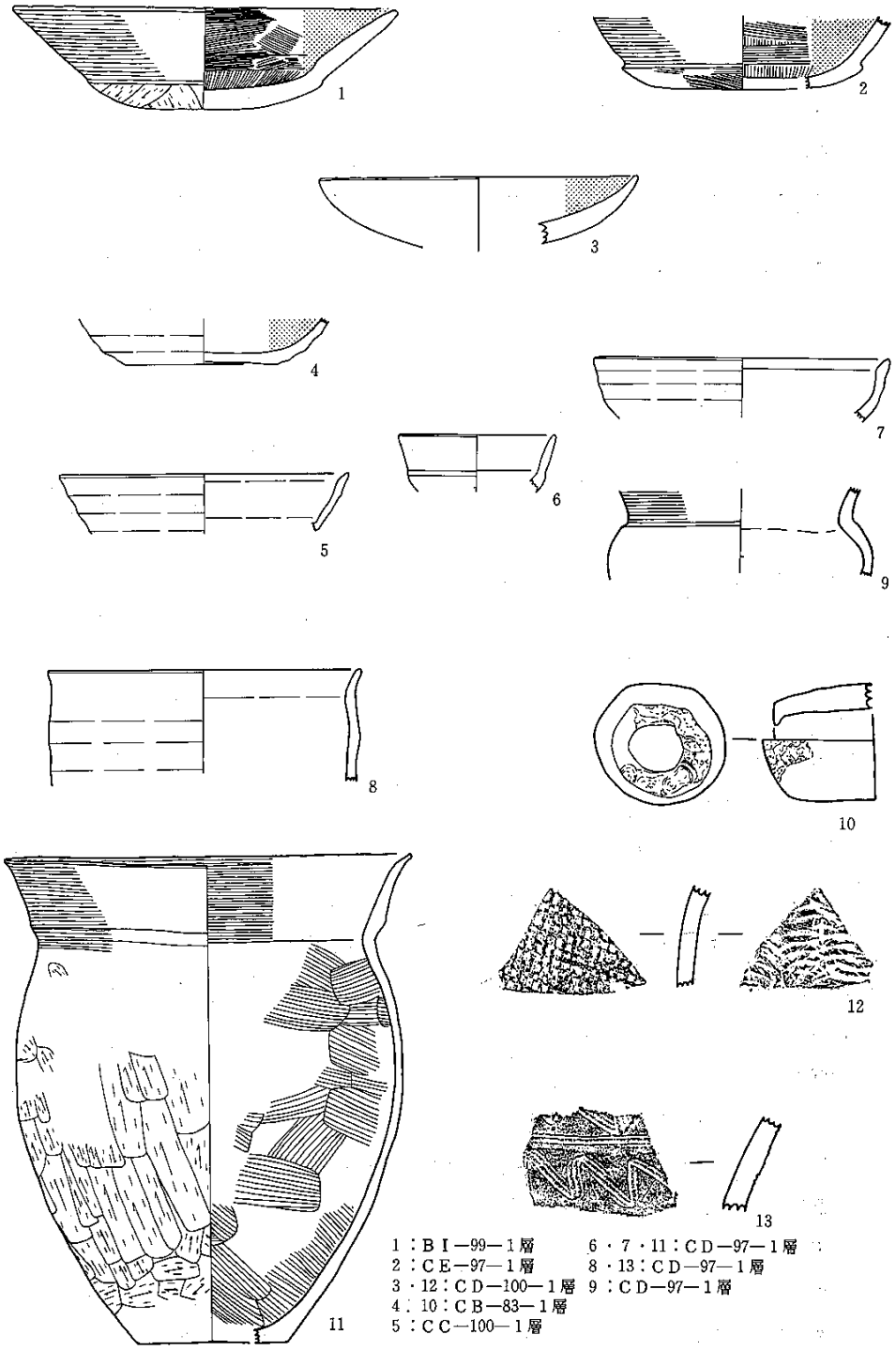
３．出土遺物（第４図）

出土遺物には土師器坏・甕，須恵器坏・甕・フイゴの羽口などがある。ここでは，図示した土器について説明を加え，所属時期について述べてみたい。

〔土師器坏〕　製作に際しロクロを使用しないもの（１～３），ロクロを使用しているもの（４）がある。前者には体部内外面に段が見られるもの（１），体部外面にのみ段が見られるもの（２），段のないもの（３）とがある。１の外面器面調整は，段から上が横ナデ，下がヘラケズリ，２の外面器調整は，段から上が横ナデ，下がヘラミガキである。３については磨滅が激しく器面調整は不明である。いずれも内面はヘラミガキ，黒色処理が施されている。

後者の底部には回転糸切り痕が残っている。内面はヘラミガキ，黒色処理が施されている。

〔土師器甕〕　製作に際しロクロを使用しないもの（９，11），ロクロを使用しているもの（８）とがある。前者の頚部には段が見られる。９は口縁部及び底部が欠損している。口縁部外面に


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
1：BI—99—1層
2：CE—97—1層
3・12：CD—100—1層
4・10：CB—83—1層
5：CC—100—1層
6・7・11：CD—97—1層
8・13：CD—97—1層
9：CD—97—1層
0
5
10cm

第4図　出土遺物

は横ナデが施されているがその他の器面調整は磨滅のために不明である。11は，口縁部内外面とも横ナデ，体部外面にはヘラケズリ，内面にはナデ痕が見られる。

後者は最大径が15.5cmと比較的小形である。磨滅が激しい。

〔須恵器坏〕　５は底部が欠損しており切り離し技法は不明である。６の体部外面には軽い段が見られる。７の口縁部内面には稜がめぐっている。６・７は底部欠損のために切り離し技法は不明である。

〔須恵器甕〕　破片としてのみ出土している。12は体部破片であり，外面は格子タタキ目，内面には青海波文のアテ目痕が見られる。13は頚部破片であり，波状文とそれに囲まれた３本の沈線がめぐっている。

次に出土土器の所属時期について述べて見たい。

〔土師器坏〕　１は栗囲式（氏家：1967，東北学院大学栗遺跡調査団地：1979)、２は国分寺下層式（氏家：1967，小井川和夫・手塚均：1978）に属すると考えられる。３の所属時期は不明である。４はロクロ使用の土器であり表杉ノ入式（加藤：1954，氏家：1957）に属する。

〔土師器甕〕　８はロクロ使用の土器であり表杉の入式（加藤：1954，氏家：1957）に属する。９・11の所属時期は不明である。

〔須恵器坏〕　６は清水遺跡(宮城県教育委員会：1976)において栗囲式土器と共伴して出土しており，同時期のものと考えられる。５・７については所属時期は不明である。

〔須恵器甕〕　13は庚申前遺跡（渡辺・結城：1976),川袋古墳群（高橋：1978）出土土器に類例が見られ，八世紀前半の年代が与えられている。12については所属時期は不明である。

以上のことから七夕西遺跡は，古墳時代後半（栗囲式）から平安時代（表杉の入式）に所属する遺跡である。

Ⅳ. 遺 跡 の 範 囲

遺物は，西地区の第２・３・４・８・９・10トレンチ，東地区の第13・14・20～23・25・26トレンチの表土から出土している。遺構は，東地区の第20～23トレンチにおいて発見されており，それは遺跡のほぼ中央にある畑地と畑地に接する南側の水田に当たる。西地区については耕作による攪乱が著しく遺構は残されていないものと考えられる。東地区については，遺構の発見された畑地と水田のレベルが他の遺構の発見されなかった水田のレベルよりも高いことから，遺構の発見された畑地及び水田以外の遺跡の大部分は開田の際に削平されてしまったものと考えられる。

Ⅴ．ま　と　め

１．七夕西遺跡は，雉子尾川によって形成された自然堤防上に立地している。

２．遺構としては，土壙10基，溝４本，ピット５が発見された。

３．遺物としては，土師器・須恵器・フイゴの羽口などが出土している。出土遺物から七夕西遺跡は古墳時代から奈良・平安時代の遺跡である。

４．遺跡は近年の開田の際にかなり削平されてしまっているが，畑地として残された部分及びレベルの高い一部の水田に残されているものと考えられる。

〈引用・参考文献〉

斎藤良治（1968）：「七夕遺跡発掘調査報告書」丸森町教育委員会

太田昭夫（1979）：「中平遺跡」宮城県文化財発掘調査報告書第57集

加藤　孝（1954）：「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」宮城学院大学研究論文集Ⅴ

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯

（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐってー奈良･平安期土師器の諸問題」柏倉亮吉教授還暦記念論文集

東北学院大学栗遺跡調査団・仙台市教育委員会他（1979）：「仙台市中田町栗遺跡発掘調査報告書」

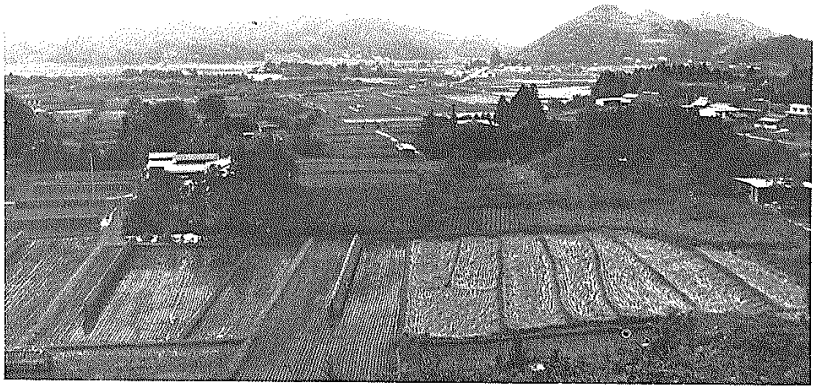
小井川和夫・手塚　均（1978）：「糠塚遺跡」志波姫町教育委員会

宮城県教育委員会（1976）：「清水遺跡」清水遺跡第３次現地説明会資料

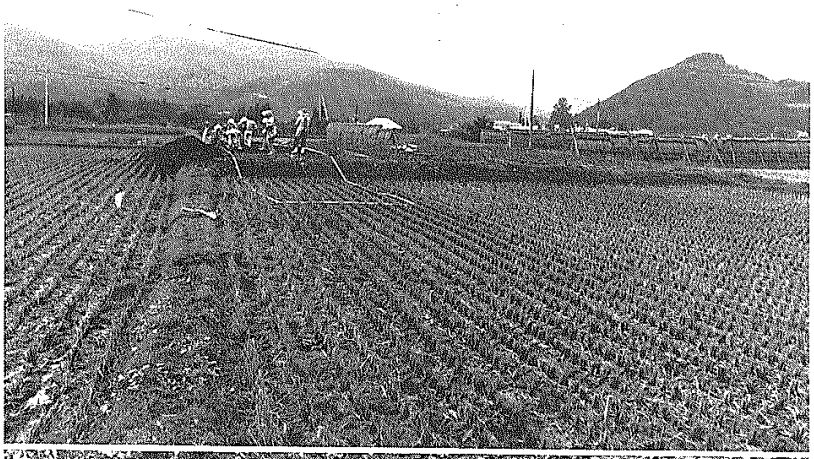
渡辺泰伸・結城慎一（1973）：「陸奥国官窯跡群ー台の原窯跡群調査研究報告ー」古窯跡研究会研究報告第２冊

高橋守克（1978）：「川袋古墳群」利府町教育委員会

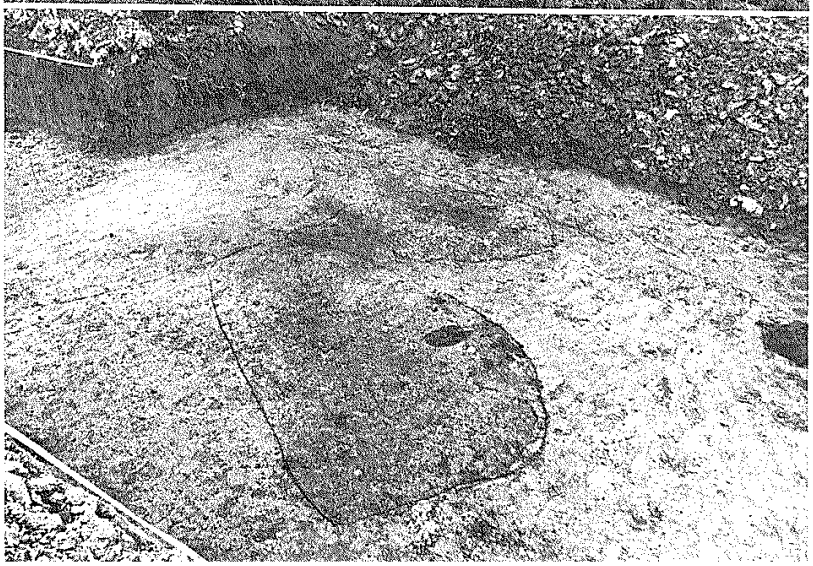
図 版 1



1．遺跡遠景
（南東から）



2．発掘状況
（東側から）



3．土壙・溝の確認
（北側から）

Ⅳ 根岸（ねぎし）遺跡

調査要項

遺跡所在地：宮城県岩出山町池月字根岸清水前６ほか

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：新庄屋　元晴・千葉　宗久

土岐山　武・加藤　道男

渋谷　正三

調査期間：昭和54年10月11日～10月27日

11月12日～11月21日

調査対象面積：630,000㎡

実発掘面積：1,400㎡

遺跡記号：ＦＴ（宮城県遺跡地名表登録番号35063）

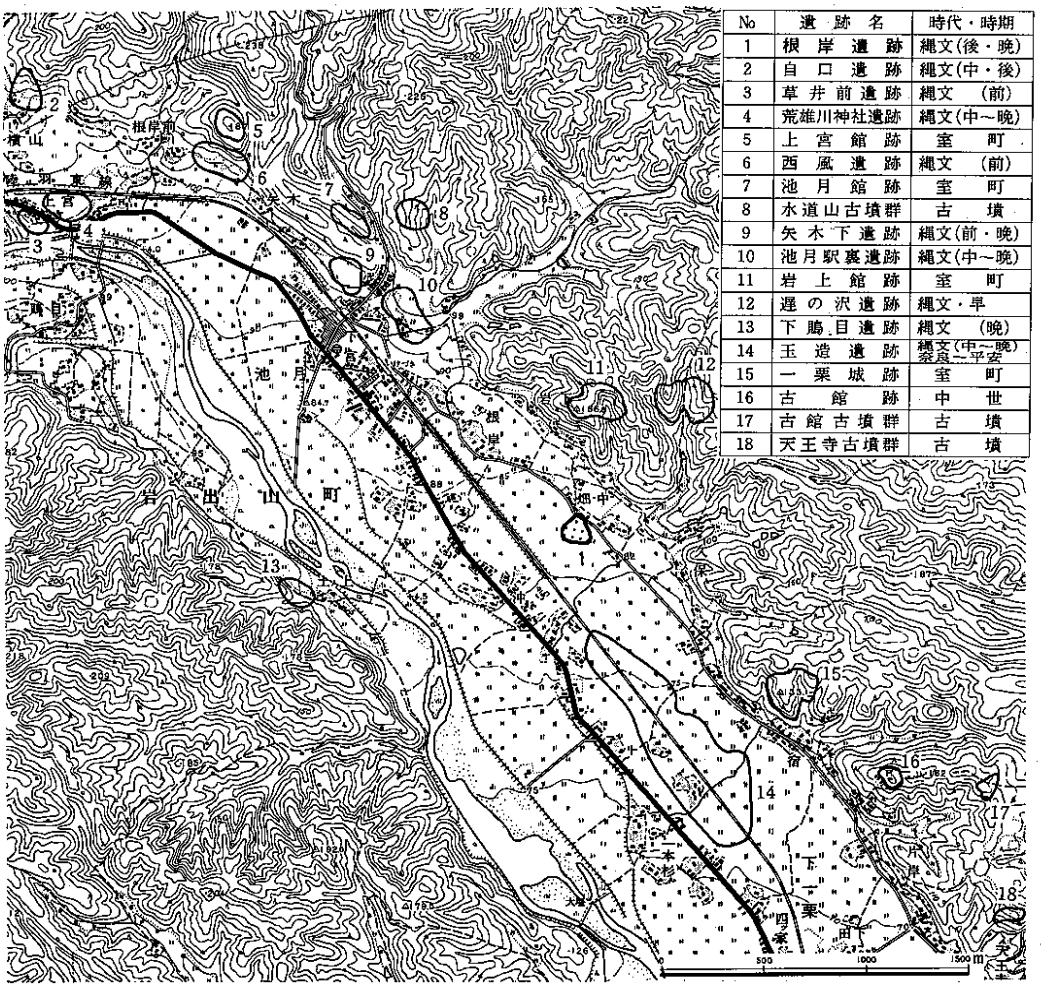
協力機関：岩出山町教育委員会

Ⅰ．遺跡の位置と環境（第１図）

根岸遺跡は，玉造郡岩出山町池月字根岸清水前６（宮城県教委：1978）に所在し，池月駅から北東へ１㎞下った地点に位置する。

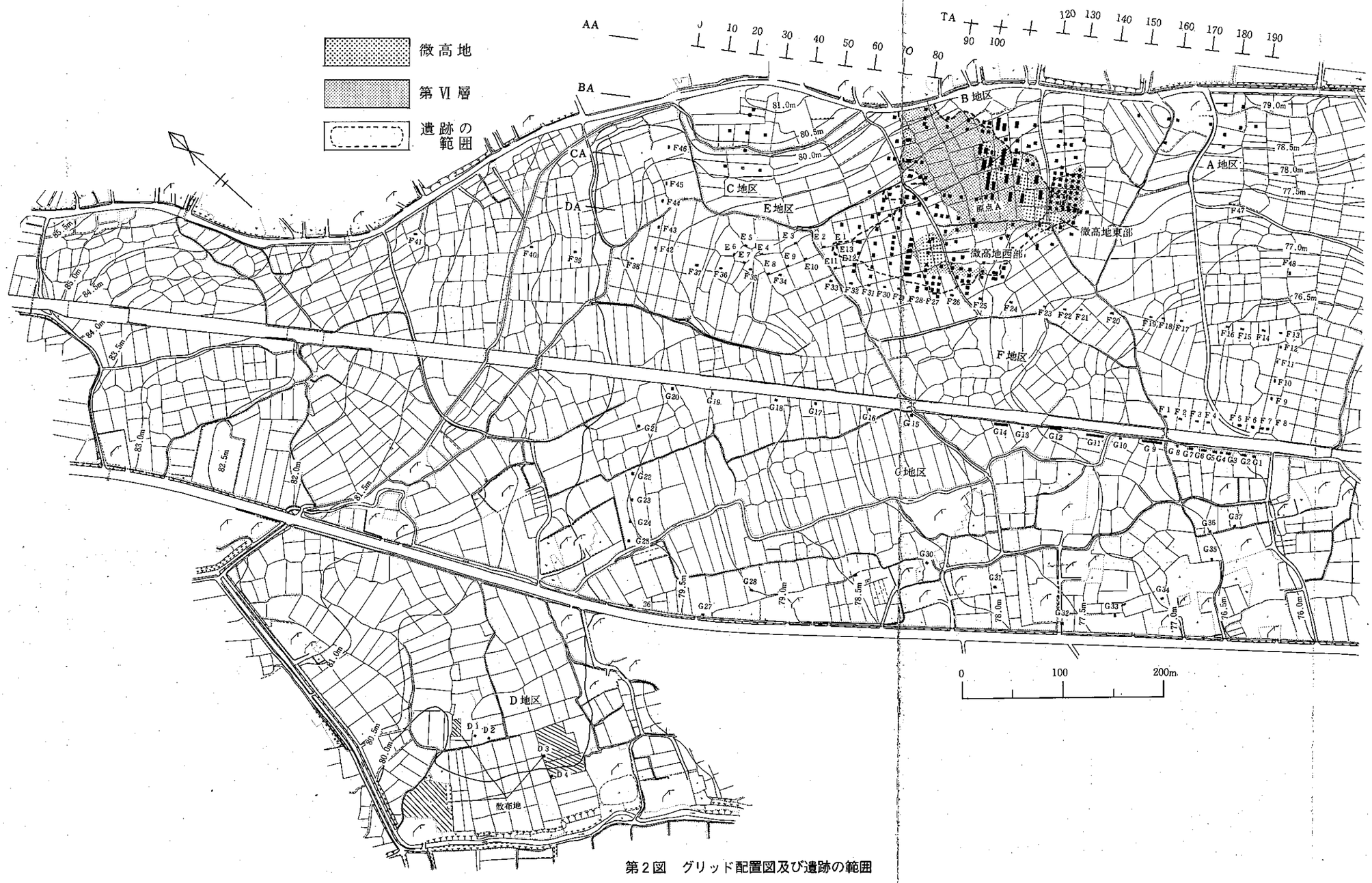
本遺跡は，荒雄岳に源を発し，北部の築館丘陵，南部の玉造丘陵を開析しながら東流する江合川によって形成された５群の河岸段丘のうち下位段丘である竹原面上の北端に立地している（小元：1966）。遺跡の立地している地域の標高は，77～81mであり北西から南東に緩やかに傾斜している。現状は水田である。

Ⅱ．調査の方法と経過（第２図）



No	遺跡名	時代・時期
1	根岸遺跡	縄文(後・晩)
2	自口遺跡	縄文(中・後)
3	草井前遺跡	縄文　(前)
4	荒雄川神社遺跡	縄文(中～晩)
5	上宮館跡	室　町
6	西風遺跡	縄文　(前)
7	池月館跡	室　町
8	水道山古墳群	古　墳
9	矢木下遺跡	縄文(前・晩)
10	池月駅裏遺跡	縄文(中～晩)
11	岩上館跡	室　町
12	遅の沢遺跡	縄文・旱
13	下鵜目遺跡	縄文　(晩)
14	玉造遺跡	縄文(中～晩) 奈良～平安
15	一栗城跡	室　町
16	古館跡	中　世
17	古館古墳群	古　墳
18	天王寺古墳群	古　墳

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　グリッド配置図及び遺跡の範囲

一栗地区の県営圃場整備事業が本遺跡の所在する地区にも及ぶこととなったため，遺跡の詳細分布調査を行なうことになった。しかし，圃場整備対象地区が広く，かつ玉造遺跡の調査で（宮城県教委：1979）明らかとなった微高地の延びが圃場整備対象地区にも及んでいると予想されたため広範囲にわたって調査することとなった。今回の調査は，本遺跡の範囲確認とその内容把握を主な目的として，実施された。

１．調査地区の設定と調査の方法

圃場整備対象地区が広範囲に及びかつ遺跡地名表に登録された本遺跡の範囲よりも延びると予想されたため，Ａ～Ｇ（２図Ａ～Ｇ地区）の７地区を設定した。

Ａ～Ｃ地区については，幹線排水路の中心線とそれに直交する枝線排水路の中心線を軸線とし，対象地区全体に３ｍ単位で方眼を組んだ。グリッド名は，北東－南西軸をアルファベット北西－南東軸をアラビア数字で表わした。Ｄ～Ｇ地区については，排水路予定地を主として，60ｍ毎に調査区を設定し，区名は，地区名とアラビア数字で表わした。

調査は，1.5×３ｍのトレンチを掘り下げたが，遺構の予想された箇所においては，この限りではない。

遺物包含層[注1)]の確認されたＢ地区においては，その厚さを調べるために，グリッド内の両隅に１～２箇所0.5×0.5ｍの探掘りを実施した。

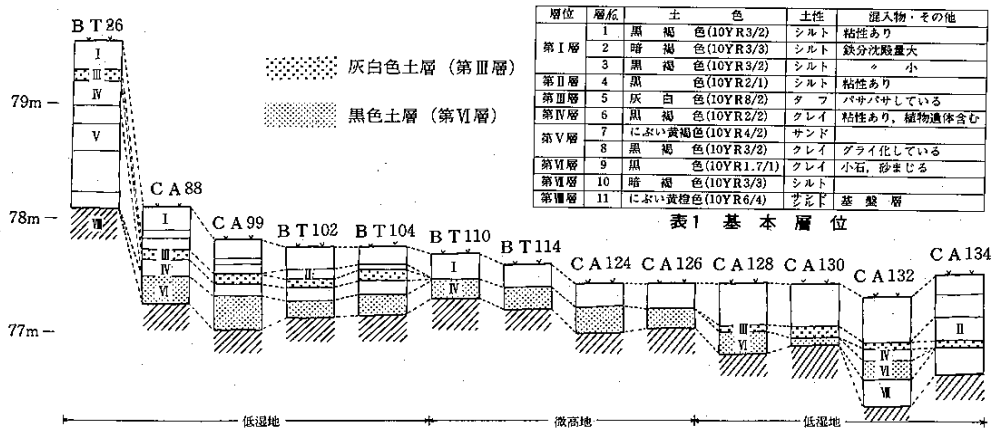
２．調査の経過

分布調査をした結果Ｂ，Ｄ地区に遺物の散布が認められたが，まず，圃場整備事業が54年度中に急遽行われることになったＧ地区から調査を始めた。その結果，水田耕作土の下にシルト層，砂礫層からなる微高地を確認することができた。その後のＦ，Ｄ地区の調査においてもこの微高地を確認し，陸羽東線北側約100ｍを境にして南東方向に延びることが明確になった。

また，Ｆ地区の調査では，その東側及び西側において，水田耕作土の下に黒色シルト層，灰白色土層，グライ化したシルト層，粘土層が堆積しており，かつて低湿地が形成されていたことが確認された。

その後，遺物の散布していたＢ地区の調査を進めた。ＢＴ102から調査したところ，水田耕作土の下に黒色シルト層，灰白色土層，グライ化したシルト層，黒色土層が堆積し，低湿地が形成されていたことを確認した。同時に，黒色土層から縄文時代の土器の出土のみ，更にＢＯ102～ＢＱ102にかけて，この層上から石組遺構を検出した。その後の調査は，黒色土層の内容把握などを目的に，その周辺にグリッドを設定した。その結果，原点Ａに近い北東部に多くの縄文時代晩期の土器を確認した。黒色土層は，Ｂ地区の低湿地，及び微高地に及んでいることも確認された。

一方，現地形で微高地を形成するＡ，Ｃ地区，Ｂ地区の北西に位置するＥ地区の調査を進め



層位	層番	土色	土性	混入物・その他
第Ⅰ層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘性あり
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	鉄分沈殿量大
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〃 小
第Ⅱ層	4	黒色(10YR2/1)	シルト	粘性あり
第Ⅲ層	5	灰白色(10YR8/2)	タフ	パサパサしている
第Ⅳ層	6	黒褐色(10YR2/2)	クレイ	粘性あり，植物遺体含む
第Ⅴ層	7	にぶい黄褐色(10YR4/2)	サンド	
	8	黒褐色(10YR3/2)	クレイ	グライ化している
第Ⅵ層	9	黒色(10YR1.7/1)	クレイ	小石，砂まじる
第Ⅶ層	10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
第Ⅷ層	11	にぶい黄橙色(10YR6/4)	サンド シルト	基盤層

表1 基本層位

第３図　微高地・低湿地 北西―南東 柱状図

たが，いずれもかつて低湿地であったことが確認された。

以上の調査によって，この段丘上には，陸羽東線寄りの微高地と陸羽東線の北東側にこれとは異なった微高地が存在し，更にその周辺に発達した低湿地を確認することができた。

註１）ここでは，遺物包含層として，とらえると，範囲が広すぎるので，遺物を含む層としてとらえたい。

Ⅲ. 調 査 の 成 果

１．基本層序（第３図）

すでに玉造遺跡で確認されているように，圃場整備対象地区の段丘上に低湿地及び微高地が形成され，更に，本遺跡では，低湿地及び微高地に遺物を含む層が存在することを確認できた。

基本的な層序は第３図及び表１の通りである。

２．発見された遺構（第４図，第２図）

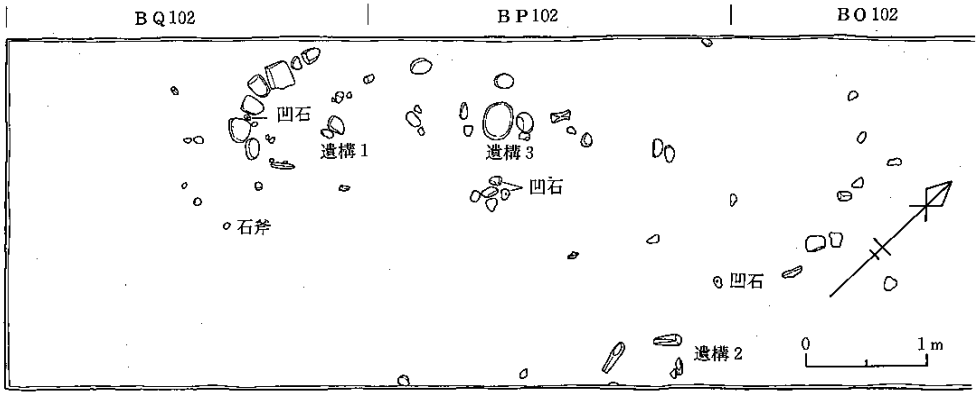
Ｂ地区の低湿地で遺物を含む層及び石組遺構が発見された。

⑴遺物を含む層[註2)]（第２図）

南北 160m，東西 100m，面積 16,000 ㎡ある。基本層序の第Ⅵ層に当たり，厚い部分で 60㎝，東西 90～180mの幅をもち，北から南にかけて緩やかに傾斜し，起伏に富む地形をなしている。形成時期は，出土遺物より縄文時代後期末～晩期末に属する。原点Ａ付近の北東部に遺物が多く出土しているので，この地域に遺物包含層の存在が予想される。

⑵石組遺構（第４図）（図版１）

ＢＰ102～ＢＱ102 にかけて，第Ⅵ層上面で検出した。径 10～20㎝ の河原石を円形に配置したもの（４図遺構１，遺構２）径 30㎝ の平たい河原石を中心に径 10㎝ 前後の河原石を円形に配置



第4図　石 組 遺 構

した遺構（４図遺構３）を検出した。遺構周辺から凹石，磨製石斧が出土している。

註２）遺物を含む層は第Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ層の３層確認されているが，ここでは，遺物包含層が予想される第Ⅵ層を言う。

３．出土遺物

出土した遺物は，縄文土器（後期～晩期），土製品，石製品，土師器，須恵器合わせて整理箱９箱分である。殆んどの遺物は，Ｂ地区から出土しており，更に時期判別可能な遺物も多いのでＢ地区出土遺物について記述する。なお，微高地西部Ⅵ層から出土した土器は縄文時代晩期のものと考えられるが時期判別可能な良好な土器が出土していないので，ここでは記述しない。土製品，石製品については，微高地Ⅵ層，遺物を含む層出土を一括して記述する。

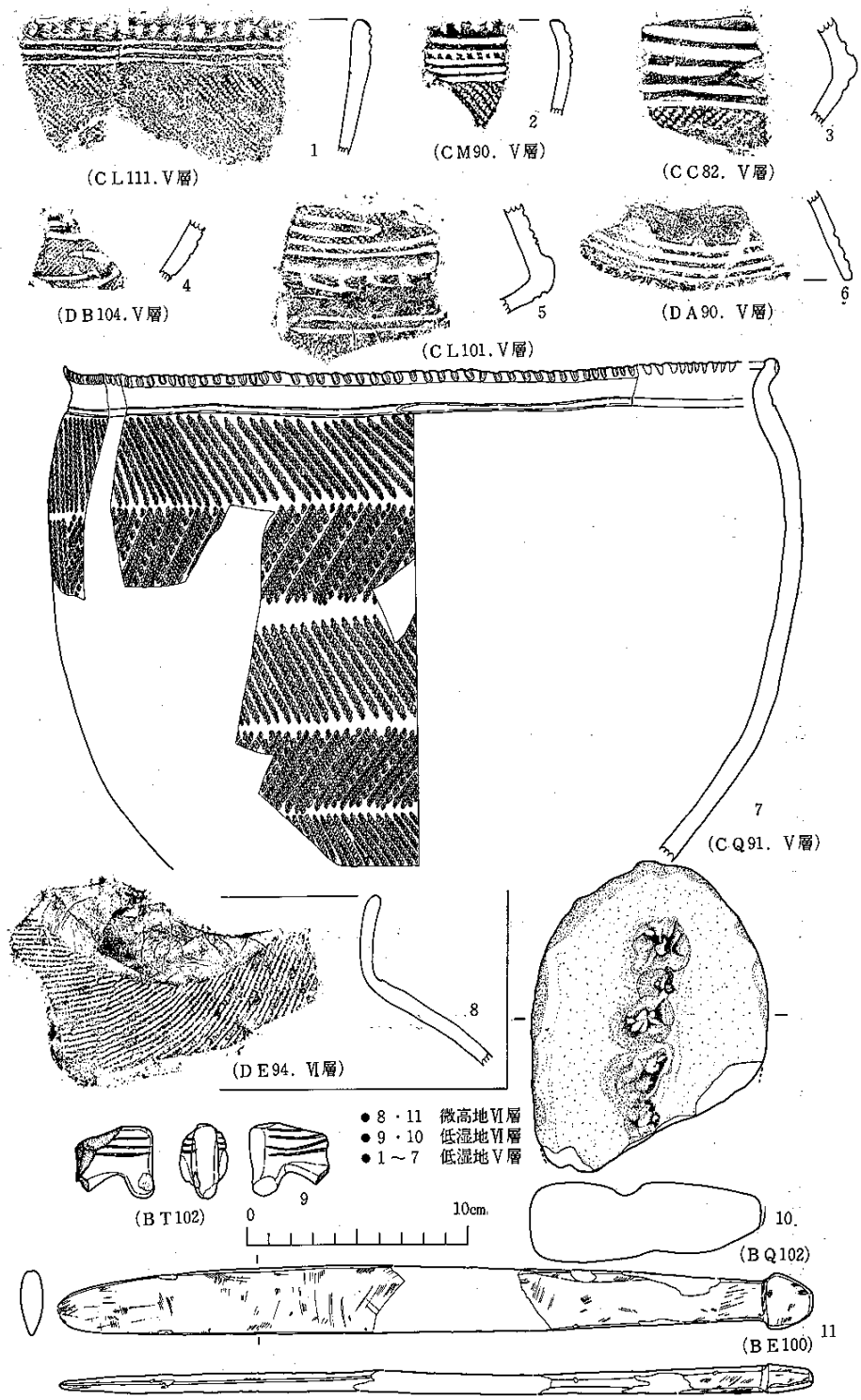
(A)　微高地東部Ⅵ層出土土器（第５図２，３，５～９，11～16）

深鉢形土器　口縁部は，内弯もしくは外反し，口縁部に２個１対の小突起を有し口縁部から頸部にかけて２～３条の平行沈線を横走させ，更に１条の刻目帯を施すもの（５図２・３），「く」の字状に外反した口縁部を有し，小突起はもたず１条の刻目帯と３本の平行沈線を施文するもの（５図５）がある。

浅鉢形土器　口縁部は，やや内弯し，口縁部にＣ字文，渦巻文（５図７），羊歯状文（５図９），工字文（５図14）を施すもの，文様単位は不明であるが磨消縄文によって文様が描かれているもの（５図13），連続浮線楕円文を施すもの（５図12）がある。

皿形土器　口縁部は，やや内弯し，口縁部に２個１対の突起を有し，口縁部から体部にかけて，三叉状入組文の末端が互いにかみ合い，１対の三叉文を伴って１文様単位を構成するもの（５図８），小波状の口縁部を有し，１対の三叉文と楕円状の曲線文様を１文様単位とするもの（５図11）　がある。

第5図　微高地東部Ⅵ層・低湿地Ⅵ層出土遺物



第6図　微高地VI層・低湿地V・VI層出土遺物

台付土器　口縁部は，やや内弯し，口縁部に三叉状入組文を施すもの（５図６）がある。

○以上の土器の所属時期は,（５図６）は大洞B式,（５図２，３，７～９，13）は大洞C_1式,（５図５）は大洞C_1, C_2式,（５図11，12）は大洞C_2式,（５図14）は大洞A式,（５図15，16）は大洞A’式であると思われる。

(B)　低湿地出土土器（第５図１，４，10，第６図１～７）

Ｂ地区の低湿地から出土した土器で，第Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ層から出土している。ここでは，時期判別可能な土器を多く含む第Ⅴ，Ⅵ層について記述する。

(1)第Ⅴ層出土土器（第６図１～７）

深鉢形土器　口縁部はやや内弯し,口唇部の刻目下に３条の平行沈線文を施すもの（６図１),平行沈線間に１条の刻目帯を有するもの（５図２）口縁部は外反し，１条の沈線をもって口縁部と体部文様とを区画するもの（６図７）がある。

浅鉢形土器　平行沈線間に連続浮線楕円文を施すもの（６図３),雲形文を施すもの(６図４）がある。

注口土器　全体の形態は不明であるが雲形文を施すもの（６図５）がある。

台付土器　台部の下端に４条の平行沈線文を施すもの（６図６）がある。

○以上の土器の所属時期は,（６図２）は大洞C_1，C_2式,（６図３～５）は大洞C_2式,（６図６）は大洞A，A’式,（６図１，７）は大洞C_2～A式であると思われる。

(2)第Ⅵ層出土土器（第５図１，４，10）

深鉢形土器　口縁部はやや内弯し，口縁部に刻目を施す突起を有し，文様単位は不明であるが磨消縄文によって文様が描かれるもの(５図１),口縁部は外反し，頚部に１条の刻目帯，３本の平行沈線文を施すもの（５図４）がある。

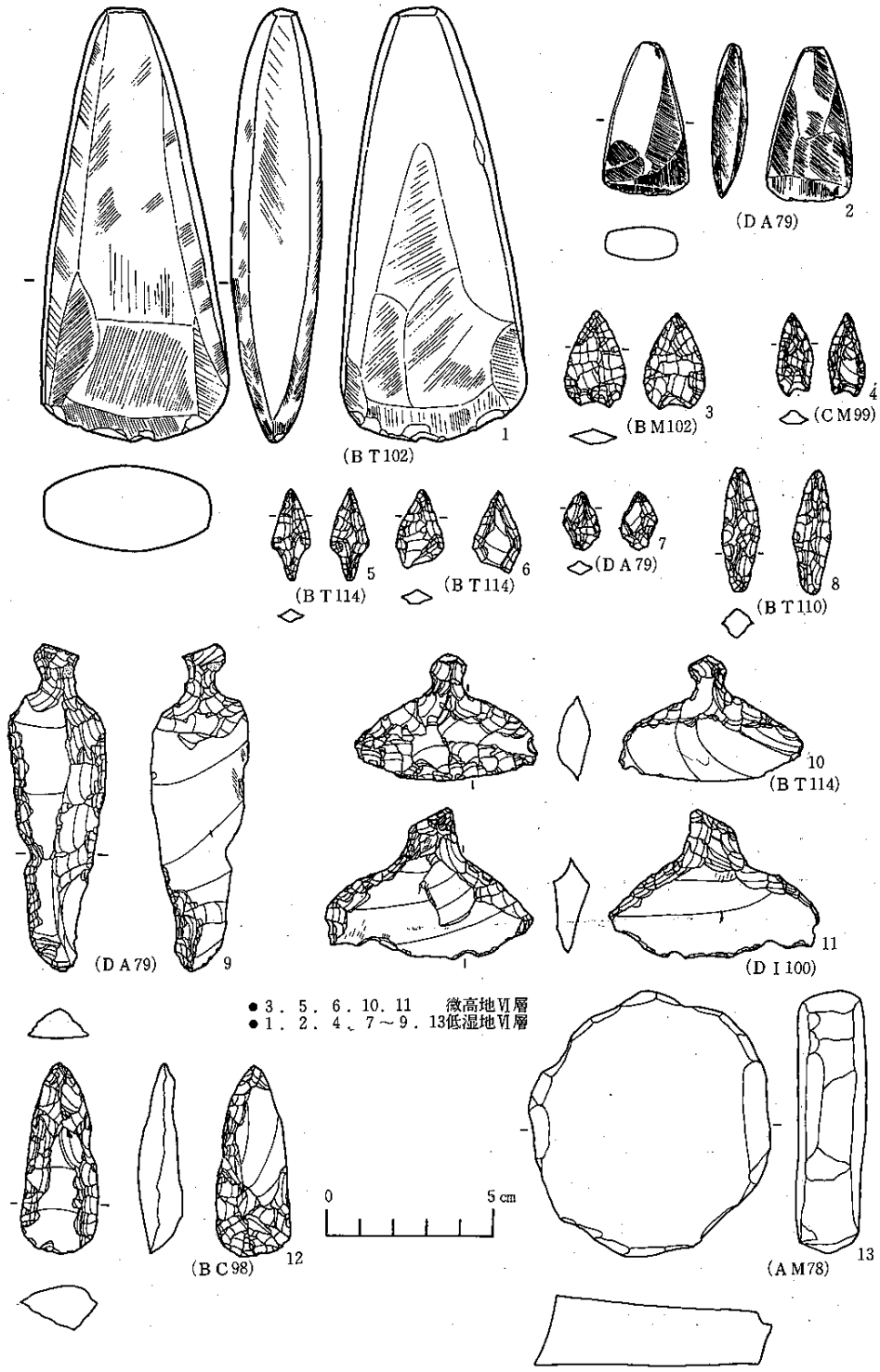
浅鉢形土器　口縁部は，やや内弯し，小波状口縁を有し，雲形文を施すもの（５図10）がある。

○以上の土器の所属時期は,（５図１）は金剛寺式,（５図４）は大洞C_1，C_2式,（５図 10）は大洞C_2式であると思われる。

(C)　微高地，遺物を含む層出土土製品・石製品（第６図９～11，第７図１～13）

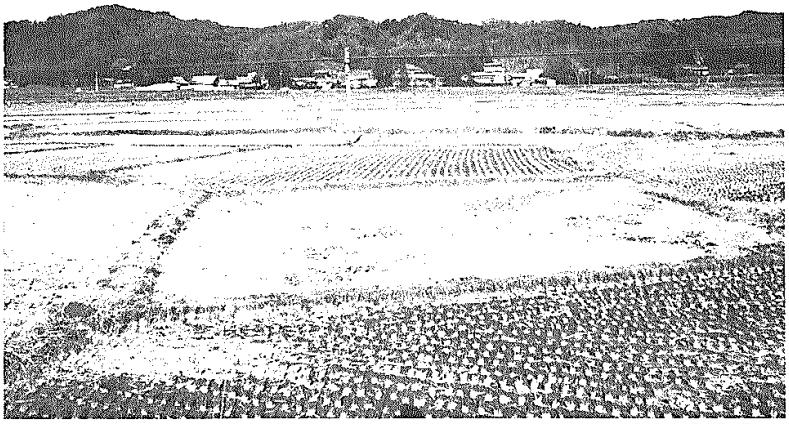
土製品は，１点，石製品は，99 点出土している。

板状土偶（６図９),凹石（６図 10),石刀（６図 11),円形石製品（７図 13),磨製石斧（７図１，２),石鏃（７図３～７),石錐（７図８),石匙（７図９～11),石箆（７図 12)がある。なお,（６図 11)（７図３，５，６，10，11）は微高地Ⅵ層より出土し，他は遺物を含む層より出土している。○以上の土製品，石製品の所属時期は，共伴する土器から，縄文時代晩期であると思われる。

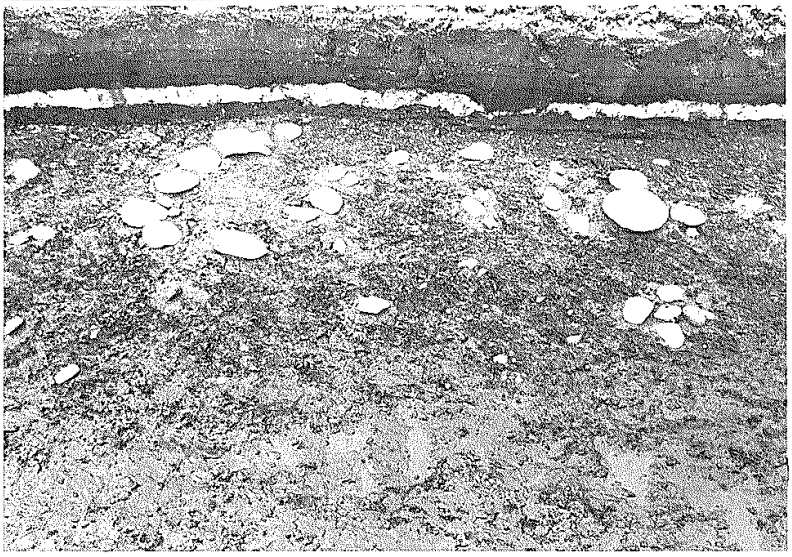


第７図　微高地Ⅵ層・低湿地Ⅵ層出土遺物

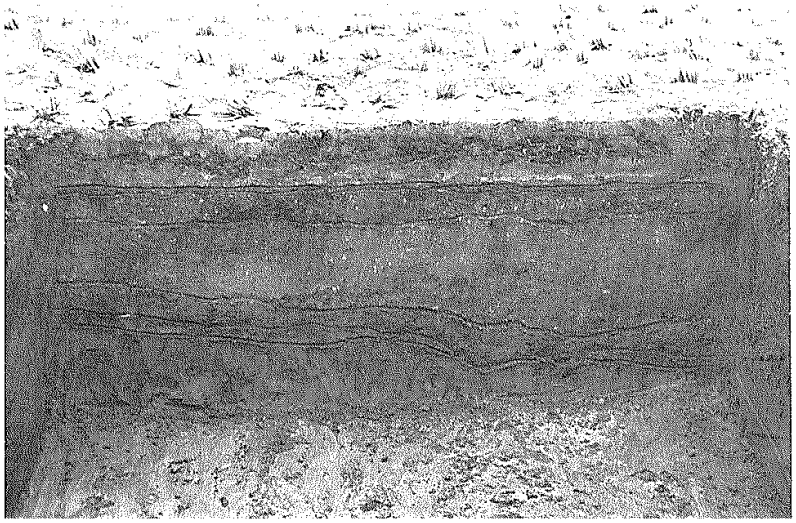
図 版 1



1．遺跡遠景（南西より）



2．ＢＰ～ＢＱ—102
石組遺構



3．Ｆ42区北東壁面

宮城県教育庁文化財保護課職員（昭和54年度）

課　　長　　氏家　和典

課長補佐　　佐藤　　茂

〃兼管理第2係長　扇　　正人

管理第1係　　長 伊藤　篤男

主　　事 佐藤　信子

〃　　三浦　正義

管理第2係主査 中田　悌子

〃　　佐藤　隆志

調査第1係係　　長　高橋　多吉

技術主査　新庄屋元春

技　　師　小井川和夫

〃　　丹羽　　茂

〃　　斎藤　吉弘

〃　　土岐山　武

〃　　千葉　宗久

〃　　真山　　悟

〃　　阿部　博志

〃　　小野寺祥一郎

〃　　小川　淳一

〃　　黒川　利司

〃　　渋谷　正三

調査第2係係　　長　佐々木茂楨

技術主査　平沢英二郎

技　　師　佐々木安彦

〃　　加藤　道男

〃　　遊佐　五郎

〃　　森　　貢喜

〃　　太田　昭夫

〃　　阿部　　恵

〃　　手塚　　均